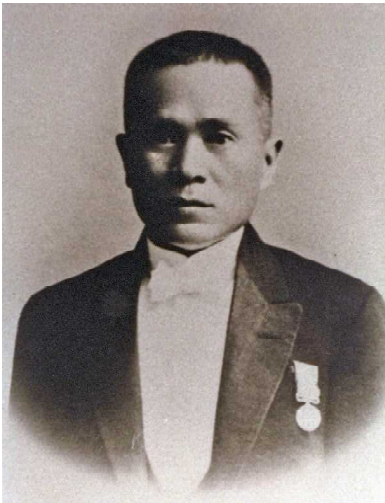


た ぐち ひやく そう

田口百三

当代稀にみる達見の士

—大規模製糸経営と優良蚕品種の創出—



田口百三 (1868 ~ 1931)

写真：(株)三龍社蔵

田口百三は、岐阜県の中津川で製糸業を営む勝野吉兵衛の四男として1868(明治元)年7月に出生。1895(明治28)年に三龍社を設立。2年後の1897(明治30)年6月、百三29歳の時、合資会社三龍社を現在の岡崎市上六名町で開業する。出資者には横浜の生糸輸出商の茂木商店や名古屋の繊維問屋瀧定も大口出資者として名を連ねている。岡崎の市街地に近い矢作川支流の乙川沿いを選定し、工場敷地面積約8,700坪、建物1,333坪、器械製糸162釜、従業員264名の開業当初から大工場として出発。その立地では、岡崎地域の将来性を見込んだ先見性から「当代稀にみる達見の士」とも評された。その後、経営の拡大と設備近代化を進め、最盛期の昭和初期には、数か所の分工場を含め、運転釜数1,500釜、従業員2,500名とも3,000名とも言われる愛知県下最大規模の製糸工場となる。

■岡崎で大規模製糸工場を開業

田口百三は、岐阜県の中津川で製糸業を営む勝野吉兵衛の四男として1868(明治元)年7月に出生。1895(明治28)年に三龍社を設立。2年後の1897(明治30)年6月、百三29歳の時、合資会社三龍社を現在の岡崎市上六名町で開業する。出資者には横浜の生糸輸出商の茂木商店や名古屋の繊維問屋瀧定も大口出資者として名を連ねている。岡崎の市街地に近い矢作川支流の乙川沿いを選定し、工場敷地面積約8,700坪、建物1,333坪、器械製糸162釜、従業員264名の開業当初から大工場として出発。その立地では、岡崎地域の将来性を見込んだ先見性から「当代稀にみる達見の士」とも評された。その後、経営の拡大と設備近代化を進め、最盛期の昭和初期には、数か所の分工場を含め、運転釜数1,500釜、従業員2,500名とも3,000名とも言われる愛知県下最大規模の製糸工場となる。



三龍社の工場全景 (1918(大正7)年頃)

写真：(株)三龍社蔵

■優良新品種「黄石丸」、「三龍又」を創出

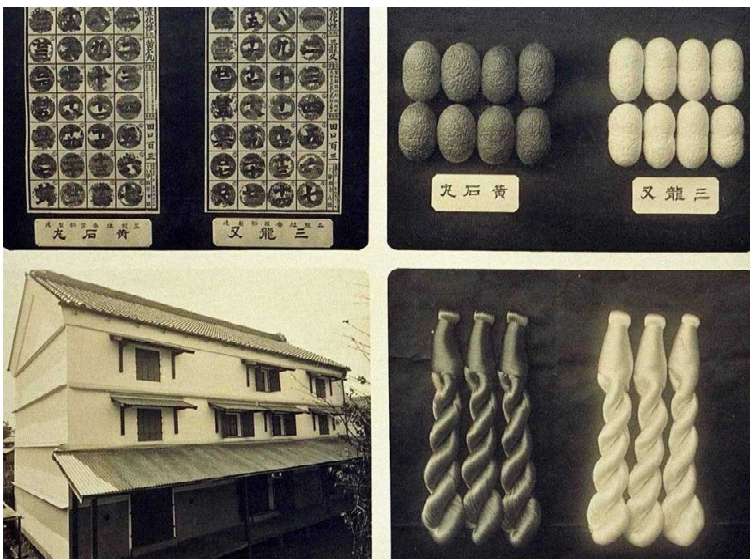
三龍社は近代的な大規模製糸工場として、早くも1901(明治34)年には外国市場である横浜でエキストラ格(飛切格)を出荷する製糸家群に入り、1917(大正6)年及び1921(大正10)年には、片倉、郡是と肩を並べる横浜出荷巨大製糸家に成長する。

こうした背景には、設備近代化だけでなく、繭の品種改良を独自に行ったことにある。開業翌年の1898(明治31)年に養蚕研究所を併設、1900(明治33)年に欧州系の黄繭種の品種改良に手がけ、1903(明治36)年に新品種「黄石丸」を創出。1905(明治38)年には日本在来の白繭種の遺伝学を応用した交雑種研究によって「三龍又」を創出する。経糸用優等糸エキストラ格製造が目的であった。この二品種は主要輸出先の米国で高評価を受け、国内でも一大革命と

評され、大正年間まで十数年間全国に普及した。

一方、1898(明治31)年に設置した養蚕研究所では農家の子弟教育も行い、養蚕技術の向上を図った。1912(明治45)年には三龍社養蚕講習所と改称し、大正後期に廃止されるまでに500名余の卒業生を送り出し、養蚕農家の育成に努めた。

田口百三は単なる経営者でなく、常に糸質の向上を目指し、品種改良、養蚕指導、選繭機や煮繭機の特許取得など製糸機械改良も社員に行わせるなど、一途に日本の近代製糸発展を念頭に置き続けた人物であった。



「黄石丸」、「三龍又」の蚕紙、繭(上)、製品(右下)、三龍社蚕種貯蔵庫(左下)

写真：(株)三龍社蔵

(天野武弘)